連載コラム

みずき野とその周辺の植物と昆虫

第６回
「ハギ」と名の付く植物たち

本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

（６）「ハギ」と名の付く植物たち

ハギ（萩）は万葉の時代やそれに続く時代には、日本人に広く愛された花で、万葉集の中には141首もの歌に萩が詠い込まれており、その後の勅撰集にも多くの萩の歌が載せられています。万葉集にはハギを「芽」または「芽子」と書いておりますが、平安時代になって「萩」という字が定着しました。これは和製の漢字で、まさに萩は日本の秋を代表する花の一つだったのです。

萩の花は、山上憶良の詠んだ、著名な「秋の七草」の歌の筆頭におかれています。

山上臣憶良、秋の野の花を詠む二首

秋の野に　咲きたる花を　指（および）折り　かき数ふれば　七草の花

(1537)

萩の花　尾花葛花　なでしこの花　女郎花　また藤袴　朝顔の花

（1538）

斎藤茂吉は、万葉集の数ある萩の歌の中から、著書「万葉秀歌（岩波新書）」の中に次の一首（作者不詳）を選んでいます。

真葛原（まくずはら）　なびく秋風　吹くごとに

阿太（あた）の大野（おほの）の　萩が花散る（2096）

「阿太の大野」は現在の五條市にあり、吉野川流域で、万葉の時代には葛の原だったようです。秋風に葛の葉が翻る度ごとに萩の花散る初秋の情景が目に浮びます。茂吉は「阿太の大野の萩が花散る」の階調音は、いうに云はれぬものであると述べています。

もう一つ、「奥の細道」の中の芭蕉の名句を載せておきます。

一家(ひとつや)に　遊女も寝たり　萩と月

芭蕉と弟子の曾良が市振(現在の糸魚川市大字市振)の宿に泊まったときの情景。一間隔てて漏れてくる新潟からの二人の伊勢参りの旅の遊女と彼女らをここまで送って来て明日には故郷に帰るという年老いた男とのとりとめのない話が聞こえてきます。遊女たちのつらい境遇と、庭前の萩と月のはかない美しさが一句に表現されています。

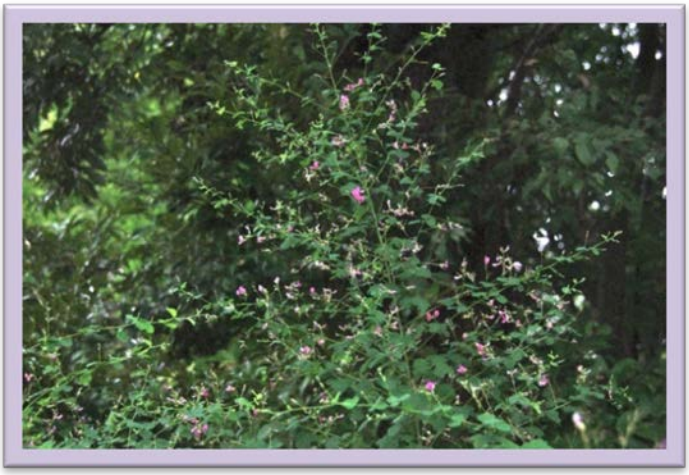
ハギには日本人特有の感性が映し出されているように思います。ハギは中国では、緑肥、飼料、薬用、繊維の利用に役立っているが、鑑賞の対象にされず、詩文に出ることも少ないそうです(北村四郎選集Ⅰ 保育社)。ハギはもともと東アジアの原産で、西洋で愛でられる機会はなかったようです。近年は、外国にも日本庭園が多く造られていますが、ハギが植えられることはほとんどなく、柳宗民は、西洋の人たちはどちらかというと派手好みで、ハギなどは寂しい花と感じてしまうからだろうと述べています(「日本の花」 ちくま新書)。

(1) ハギの仲間

ハギはマメ科の灌木です。ハギという名は総称で、ヤマハギ、マルバハギ、ニシキハギ、ツクシハギ、ミヤギノハギ、キハギなどに分かれており、葉のかたちや葉の上の毛の様子、萼筒のかたち、実のかたちなどの違いによって区別します。しかし、外観はどれも似たようなものです。

上に挙げた選集の中で、北村は、ヤマハギは京都や奈良には普通にはなく、ツクシハギやニシキハギが多く、したがって、古代の歌や文にあるハギはツクシハギやニシキハギであろうと述べています。
しかし、「もりやの自然誌(守谷町教育委員会)」には、ツクシハギやニシキハギはなく、ヤマ

ハギとミヤギノハギの2種が記録されているだけです。
みずき野周辺には、さくらの杜公園、3丁目東土手下、山富園北斜面にハギが見られますが、どれもヤマハギのようです。さくらの杜公園の東側の水路上に垂れているハギにも8月中旬には、はやくも初秋の風情がありました。



ヤマハギ
８月中旬
さくらの杜公園

ハギへの愛好から、日本人は、ハギではないが、ハギに似たすがたの植物にも、ハギという名を与えております。

（２）ネコハギとメドハギ

ネコハギ　８月下旬
３丁目東土手下

ネコハギとメドハギもハギに近縁の植物ですが、上に述べたハギの仲間はみな灌木で、ネコハギやメドハギは多年草です。
ネコハギは地面を這っているので、あまり目立たないのですが、比較的普通の植物で、花の咲く初秋のころは日当りの良い道ばたによく見つかります。なぜネコハギというのかよく分かりません。葉に毛が多いためでしょうか。花がネコの顔に似ているせいでしょうか。

メドハギはみずき野周辺に最も多い植物の一つです。草丈も高く60～100センチになり、枝もたくさん分枝を造り、花の基部が紫で、全体的には白ないし黄色の花をたくさん咲かせます。メドハギは漢字で蕎萩と書きますが、蕎だけでもメドハギの意味になり、めどき（筮）としてこの茎を用いたことがメドハギの名の由来のようです。広辞苑でめどき（筮）を調べますと、「占いに用いる細い棒。蕎萩（めどはぎ）の茎50本を一組として用いる。後世は多く竹で造り、筮竹（ぜいちく）という」とありました。

メドハギ
９月中旬
３丁目東土手下

（３）ヌスビトハギの仲間

ヌスビトハギ
８月下旬

ヌスビトハギ
９月中旬

いずれも
上高井地区

ヌスビトハギの仲間はいずれも果実に特徴があります。マメ科ですから、実とは豆を含む莢（さや）なのですが、莢は、豆１粒ずつを含む小室に分かれ、関節で連なっています。短いが丈夫な毛がびっしり生えていて、莢が熟すると莢の小室が一つずつ離れ、人の衣服や動物の毛にくっついて遠方に運ばれるのです。これは巧みな種子伝搬の仕組みです。このような種子伝搬の仕組みをもつものには、他の植物にも多くみられます。イノコヅチ、センダングサの仲間、オナモミやメナモミの仲間、ハエドクソウ、チヂミザサなどです。このように、人の衣服や動物の毛にくっつく実を俗に「ヒッツキムシ」といいます。

マルバヌスビトハギ
７月下旬
８丁目東水路沿い

アレチヌスビトハギ
上高井地区

実には毛が生えていて、もう少し成熟すると「ヒッツキムシ」になる。

みずき野周辺で見られるヌスビトハギの仲間には、ヌスビトハギ、マルバヌスビトハギ、アレチヌスビトハギを見かけます。このうち、マルバヌスビトハギはヌスビトハギの変種で、共に在来種。両者とも莢の室は2つ繋がっています。アレチヌスビトハギは、北米または中米由来の帰化種で、莢の室は3つないし4つ繋がっています。

ヌスビトハギは、服やズボンにこっそりと自分の実をくっつけて、遠くに運んでもらうのですが、なにも人様のものを盗むわけではありません。不名誉な名をつけられたものです。

ヌスビトハギの名の由来は、果実のかたちを盗人の足跡に見立てたとする説（牧野富太郎が言い出したもの）がありますが、ほかにも野盗のようにこっそり人のあとについてくるからという説などあり、定説ははっきりしません。いずれにせよ、ヌスビトハギという命名は無粋とはいえ、ハギの仲間に非常に近いことで、科学的には理に適っていると考えられています（大橋広好　週刊朝日百科「世界の植物」）。

（４）シナガワハギ

シナガワハギは守谷では滅多に見なかった植物ですが、昨年はみずき野からひがし野に通ずる新道の脇に群がって生えているのを見ました。ハギと同じマメ科の植物ですが、まったく別の仲間の越年草（＝２年草）です。昔、品川付近に多く見られたのでシナガワハギと命名されたのだそうです。在来種、帰化種の両説がありますが、国立環境研究所のデータベースでは、侵入生物としてリストされているので、国としては帰化種とみなしているのでしょう。帰化種とすれば、アジア大陸から来たものと思われます。

シナガワハギ
７月下旬　本町地区
（みずき野西の新道沿い）

（５）ナンテンハギ

秋の野を飾る美しい花です。やはりマメ科の多年草ですが、ハギとは縁が薄く、ソラマメに近い植物です、みずき野町内には見かけませんが、貝塚地区や本町地区の藪陰によく見かけます。1枚の葉が2つの小葉に分かれており、それぞれの小葉がナンテンの葉のように見えるのでナンテンハギというのですが、2つの小葉の外観からフタバハギとよぶこともあります。

ナンテンハギ
７月下旬　貝塚地区

（６）ミソハギ

上記「ハギ」と名のつく植物はすべてマメ科だったのですが、ミソハギはまったく別のミソハギ科の多年草です。しかし外観から、いやむしろ遠目から、あたかもハギが咲いているように見えるところから、ハギの名がついたのでしょう。

ミソハギの名は禊萩（みそぎはぎ）からきたものと思われ、盂蘭盆会に仏前に供える風習があります。そのためか、雑草は刈られても、ミソハギは田のへりや畦にそのまま残されている風景をよく見ます。

ミソハギは水辺が好きで、小川のほとりなどにもよく咲いています。その様子を金子みすゞは「みそはぎ」という童謡に歌っております。

ながれの岸のみそはぎは、
だれも知らない花でした。

ながれの水ははるばると、
とおくの海へゆきました。

大きな、大きな、大海で、
小さな、小さな、一しずく、
誰も、知らないみそはぎを、
いつもおもって居りました。

それは、さみしいみそはぎの、
花からこぼれた露でした。

ミソハギ
８月上旬　貝塚地区